文化財情報資料部　2－(4)－②－1)

令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』(シ07)

『日本美術年鑑』

日本美術年鑑は、我が国の各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録した刊行物である。文化財情報資料部では当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936（昭和11）年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。令和2年度は、令和元年版の編集を行い、令和3年5月に刊行。出版に際し、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

『美術研究』

1932（昭和7）年1月、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第1号を刊行。以来、80年以上にわたり、日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関する西洋美術についての論説、研究ノート、書評、展覧会評、研究資料・図版解説等を掲載している。令和2年度は431号、432号、433号を刊行した。出版に際して、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

無形文化遺産部　2－(4)－②－1)

無形文化遺産部出版関係事業(ム04)

『無形文化遺産研究報告』第15号

無形文化財や無形民俗文化財、文化財保存技術に関する研究論文、調査報告、資料紹介等を掲載している。

『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書』

無形文化遺産部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して無形の民俗文化財の保護と継承について研究協議する会を開催している。第15回にあたる令和2年度は、「新型コロナ禍の無形民俗文化財」と題してリモートで開催し、報告・総合討議の内容などを報告書にまとめた。

保存科学研究センター　2－(4)－②－1)

『保存科学』第60号の出版(ホ07)

『保存科学』第60号

早川泰弘、友田正彦、間渕創（文化財活用センター）、貴田啓子（東京藝術大学）の4名からなる編集委員会を編成、投稿された14件全ての原稿に対して、査読委員による査読を実施、報文2件、報告10件、資料2件、計14件の掲載を決定した。2021年3月刊行、160ページ。

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』

東京文化財研究所概要』は研究所の組織や活動内容を、写真を多用して日英２ヶ国語により簡潔に紹介している。令和２年度の概要はA4判37ページ。

『TOBUNKENNEWS』はウェブサイトに公開した毎月の「活動報告」から、紙媒体に適した記事を精選し、文化財保存に関するコラム、刊行物紹介等とともに掲載している。A4判。令和２年度はNo.72（7月刊、36ページ）、73（2月刊、44ページ）を刊行した。

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』はそれぞれ、各部・センターからの部会員で構成される東京文化財研究所広報委員会の概要部会、ニュース部会が作成し、編集事務はいずれも研究支援推進部企画渉外係が担当している。

プロジェクトの一環として刊行された刊行物

『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究―ワット・ラーチャプラディットの漆扉―』

本書は、東京文化財研究所が実施しているタイに所在する日本製漆工品に関する調査研究のひとつとして、タイ・バンコク所在の王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディットの漆扉部材に関するこれまでの調査研究成果を報告するものである。2021年3月刊行、144ページ。

（①シ02の一環として実施）

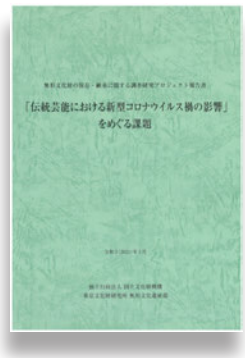
『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　春日権現験記絵
巻九・巻十　光学調査報告書』

東京文化財研究所が宮内庁三の丸尚蔵館と共同で2003（平成15）年から実施してきた、鎌倉時代を代表する絵巻物「春日権現験記絵」全20巻のうち、巻九・巻十を対象とした光学調査報告書である。高精細画像と蛍光X線分析による彩色材料調査結果を併せて収録した。日本語・英語、2021年3月刊行、104ページ＋口絵135ページ。

（④シ05の一環として実施）

『東京文化財研究所　研究報告書
売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』

2015（平成27）年4月から東文研と東京美術倶楽部が共同で行ってきた売立目録デジタル化事業が2019（令和元）年3月に完了し、同年5月からその成果として「売立目録デジタルアーカイブ」を東文研資料閲覧室で公開した。そのアーカイブに関して、2020（令和2）年2月に実際の利用者や入力者等による研究発表を行ったが、本報告書は、その研究発表の内容に一部の報告を追加して刊行したもの。2021年3月刊行、168ページ。



無形文化財の保存・継承に関する調査研究プロジェクト報告書『「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」をめぐる課題』

無形文化遺産部無形文化財研究室が、2016（平成28）～2020（令和2）年度の中期計画に基づいて行ってきた「無形文化財の保存・継承に関する調査研究」の報告書。特に2020（令和2）年から行っている古典芸能を中心とした伝統芸能への新型コロナウイルス禍の影響調査を中心に採録した。2021年3月刊行、41ページ。
（①ム01の一環として実施）

『フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」報告書』

2020（令和2）年9月25日に東京文化財研究所で行われた、【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」をもとに、一部追録し、報告書として刊行。2021年3月刊行、97ページ。
（①ム01の一環として実施）

パンフレット『日本の芸能を支える技』VI 三味線　株式会社 東京和楽器

2017（平成29）年より継続的に行っている、楽器を中心とした文化財保存技術の調査と並行して、楽器製作者とその技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2020年12月刊行、12ページ。
（①ム01の一環として実施）

パンフレット『日本の芸能を支える技』VII 箏　国井久吉

2017（平成29）年より継続的に行っている、楽器を中心とした文化財保存技術の調査と並行して、楽器製作者とその技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2021年3月刊行、8ページ。（①ム01の一環として実施）

『箕のかたち　自然と生きる日本のわざ』

2020（令和2）年12月～1月にかけて東京汐留メディアタワーで開催した「箕のかたち―自然と生きる日本のわざ」展のパネルを整理してまとめた冊子。民具の「箕」について、製作技術や素材を中心に多数の写真とともに紹介。日本語。2021年3月刊行、14ページ。
（①ム01の一環として実施）

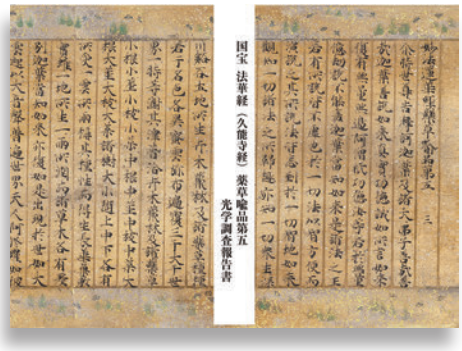
無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書『絹織製作技術』

2015（平成27）～2018（平成30）年度年度にかけて調査を行った勝山織物株式会社絹織物製作研究所（長野県飯島町）における絹の製作技術に関する報告書。本報告書では絹織物製作研究所における製作理念の基となる資料、在来の蚕種と桑を用いた養蚕、製糸、製織の全工程の技術を記録した。そのほか、東京国立博物館・東京文化財研究所の研究員による画絹についての論考も掲載されている（DVD付）。2021年3月刊行、101ページ。
（①ム03の一環として実施）

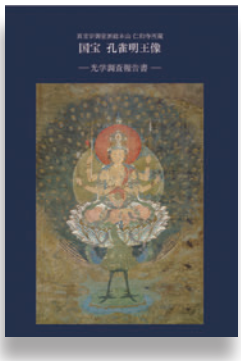
『及川尊雄収集 紙媒体資料目録』

無形文化遺産部では、日本の伝統楽器や関連資料の収集家であり及川鳴り物博物館館長であった及川尊雄氏（1942-2018）の遺した3,515点に及ぶ紙媒体資料の調査を2018（平成30）年より行ってきた。その成果として、『及川尊雄収集 紙媒体資料目録』として各論4本と共に目録を収めて刊行。2021年3月刊行、158ページ。
（①ム01の一部として実施）

『国宝 法華経（久能寺経）薬草喩品第五 光学調査報告書』



国宝「法華経（久能寺経）薬草喩品第五」に関する光学調査が2020（令和2）年に実施され、界線に真鍮泥が用いられていることが明らかになった。本報告書では、その調査結果を広く周知することを目的に、カラー・近赤外・蛍光写真及び蛍光エックス線分析による調査結果を収録した。2021年3月刊行、80ページ。
（②ホ03の一環として実施）



『真言宗御室派総本山仁和寺所蔵　国宝 孔雀明王像 光学調査報告書』

真言宗御室派総本山仁和寺が所蔵する国宝 絹本著色「孔雀明王像」に関する光学調査が2019（令和元）年に実施された。本報告書では、カラー・近赤外・蛍光写真及び蛍光エックス線分析による調査結果を収録した。2021年3月刊行、152ページ。
（②ホ03の一環として実施）

『文化財修復処置に関するワークショップ —ゲルやエマルションを使用したクリーニング法—』

本報告書は、2019（令和元）年10月8日～10日の3日間にわたり保存科学研究センターが開催した「文化財修復処置に関するワークショップ　—ゲルやエマルションを使用したクリーニング法—」の記録である。講師には、イタリアから保存科学者パオロ・クレモネージ氏を招待した。文化財のクリーニング方法は2000年代初めから欧米で変革的な進化を遂げ、この10年ほどの間に世界各地でワークショップや研究会が開催されていたが、本ワークショップはアジアで初めてのゲルクリーニングに関するワークショップとなった。

　ワークショップは、クレモネージ氏の英語による講義を日本語に逐語通訳して行われた。午前に理論的な座学、午後に実技研修を行なった。今回のワークショップは通訳の時間の関係もあり、有機溶媒以外の主に水を用いるクリーニングに焦点を当てた講義と実演を行って頂いた。2021年3月刊行、104ページ。
（②ホ05の一環として実施）

『文化財修復処置に関する研究会
—クリーニングとゲルの利用について—』

本報告書は、イタリアの保存科学者パオロ・クレモネージ氏をお招きし、2019（令和元）年10月11日に日本及び西洋における文化財のクリーニングについて、現場における問題提起と最新の研究紹介を目的に、「文化財修復処置に関する研究会　—クリーニングとゲルの利用について—」を開催した講演記録である。

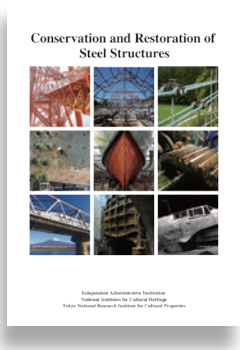
研究会においては、クレモネージ氏からのご発表のほか、国宝修理装潢師連盟理事長の山本記子氏、写真修復家の白岩洋子氏から近年のそれぞれの分野における修復事例の紹介があり、さらに保存科学研究センター早川典子、鳥海秀実から関連の事例報告を行った。日本語・英語、2021年3月刊行、74ページ。

（②ホ05の一環として実施）

『未来につなぐ人類の技20—内部造作の保存と修復』

本書は、近代文化遺産研究室が令和２年度に実施した「内部造作の保存と修復に関する調査研究」を取りまとめた報告書である。文化財所有者・修復技術者等が、保存と修復の実務で利用することを念頭において、国内の有識者の論考を加え、同室が実施した事例調査の結果をまとめた事例集を収めている。2021年3月刊行、106ページ。

（②ホ06の一環として実施）



『Conservation and Restoration of Steel Structures』

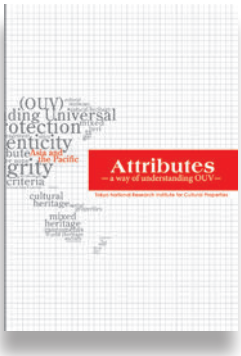
本書は、近代文化遺産研究室が平成30年度に刊行した「鉄構造物の保存と修復」の英訳版である。国内外の鉄構造物の保存と修復に関して、各分野の専門家の論考や、国内の修復事例をまとめたものを広く海外の専門家にも紹介し、日本の近代文化遺産への取り組みを広めるために刊行した。英語、2021年2月刊行、130ページ。

（③コ03の一環として実施）

『Attributes　–a way of understanding OUV–』

顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value ／ OUV）の「属性」については、近年世界遺産の保全に関連して求められることの多い遺産影響評価においてその整理が必要となる一方で、国内外でその整理の方法に関して少なからざる混乱が見られる。このため、世界遺産に関わる各国の専門家にそれぞれの理解についての寄稿を求め、当面の理解の一助とするとともに、さらなる議論を惹起することを目的としたもの。英語、2021年3月刊行、168ページ。

（④コ01の一環として刊行）



『各国の文化財保護法令シリーズ[25]英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）』

イングランドを中心とする英国の文化財保護に関する法令について、その中核をなす法律２種（1990年計画（登録建造物及び保存地域）法、1979年古記念物及び考古地域法）、これと関連する枠組文書（国家計画政策の枠組み）を和訳し、さらに英国政府担当者に依頼して英国の文化財保護制度の概説を付して刊行した。（日本語・英語、2021年3月刊行、1028ページ。
（④コ01の一環として刊行）

『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか（第一部）』

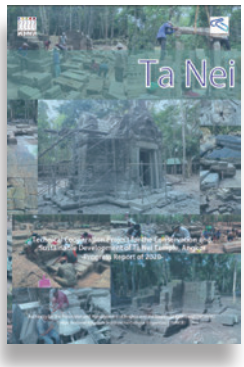
新型コロナウイルス感染症の影響で開催を断念した研究協議会に代わり、２ヵ年で行うプロジェクトとした表題のテーマに関連して、史跡・名勝等と建造物、国内と国際という二つの観点の軸を設定し、４名の専門家に寄稿を依頼するなどして概念及び論点の整理を行って報告書として刊行したもの。日本語、2021年3月刊行、57ページ。
（④コ01の一環として刊行）

『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理』

2020（令和２）年11月にオンラインで開催した研究会の議事録。東南アジアで実際に行われている木造建築保存の様々な方法や技術に関する報告及びそれらを日本の木造建築保存の考え方や方法論と比較分析する観点で行った討議の内容を収録。日本語・英語併記、2021年3月刊行、74ページ。
（③コ02の一環として刊行）

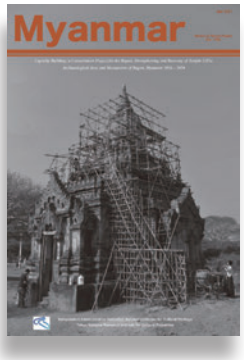
『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor -Progress Report of 2020-』

2020（令和２）年に東京文化財研究所がアンコール・シエムリアプ地域保存整備機構（APSARA）と共同で実施した、カンボジアのタネイ寺院遺跡における保存整備事業に関する報告書。同遺跡東門の修復における再構築工事の経過、修復及び補強の方法に関する議論の記録等を収録。英語、2021年3月刊行、147ページ。APSARAと連名による刊行。
（③コ02の一環として刊行）



『Lokahteikpan Wall painting Project, Pagoda 1580』

平成29（2017）年から令和2（2020）年にミャンマーのバガン遺跡で実施した寺院壁画の保存修復に関する事業報告書。近年、現地で議論がつづく保存修復材料の経年劣化に伴う問題点への対処法を示すなど、継続性を有する文化遺産保護活動とは何かに着目して行われた活動の成果を報告書としてまとめたもの。英語、2021年3月刊行、177ページ。
（③コ03の一環として刊行）



『Me-taw-ya Temple Project (No.1205) “Capacity Building; a Conservation Project for the Repair, Strengthening and Recovery of Temple 1205a, Archaeological Area and Monuments of Bagan, Myanmar 2016–2020』

平成28（2016）年から令和2（2020）年にミャンマーのバガン遺跡で実施した煉瓦造寺院外壁の保存修復に関する事業報告書。東京文化財研究所による同国宗教文化省との協力事業に関するこれまでの経緯、事業概要について収録したもの。 英語、2021年3月刊行、197ページ。

（③コ03の一環として刊行）

『在外日本古美術品保存修復協力事業』

在外日本古美術品保存修復協力事業の基本情報を掲載した報告書である。現地調査、修復作品などのリストを更新した。日本語・英語、2021年3月刊行、20ページ。

（③コ04の一環として実施）

『在外日本古美術品保存修復協力事業
檜・八橋図　No.2017-1 』

当該事業で行ったインディアナポリス美術館所蔵「檜・八橋図」（屏風、6曲1双）の保存修復報告書である。日本語・英語、2021年3月刊行、48ページ。

（③コ04の一環として実施）

『在外日本古美術品保存修復協力事業
林和靖・太公望図　No.2017-2 』日

当該事業で行ったインディアナポリス美術館所蔵「林和靖・太公望図」（掛軸、2幅）の保存修復報告書である。日本語・英語、2021年3月刊行、35ページ。

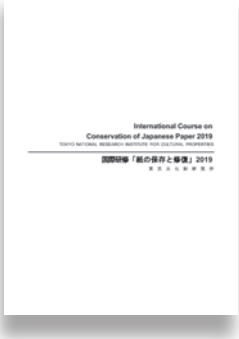
（③コ04の一環として実施）

『在外日本古美術品保存修復協力事業
煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』

当該事業で行ったインディアナポリス美術館所蔵「煙寺晩鐘図・平沙落雁図」（掛軸、2幅）の保存修復報告書である。日本語・英語、2021年3月刊行、31ページ。

（③コ04の一環として実施）

『国際研修「紙の保存と修復」2019』

2019年9月9日から27日にかけてICCROMと共催した国際研修「紙の保存と修復」の報告書である。講義、実習、スタディーツアーにおける研修内容に加えて、研修中の質疑応答、参加者に対して行ったアンケート結果なども収録した。日本語・英語、2021年3月刊行、192ページ。

（③コ05の一環として実施）